

町誌編さん室の

島のむんがたり

シマ（集落）の記憶と記録

現在、町誌編さん室ではシマジマの場所に宿る「歴史」を書物に編み上げるべく、『町史民俗編シマの記憶』の編集を進めています。そこで今回は、轟木集落に伝わる記録（*）から、明治・

大正・昭和初期のシマの姿を垣間見たいと思います。

現在も轟木集落において大切に保管されている記録は「明治43年4月1日現」が起点となっています。主な構成は集落の基本財産台帳、財産目録、契約書、部落共有林関係綴、作見取締規定などです。

例えば、基本財産台帳からは当時の集落の収支状況がわかります。明治四四年（1911年）6月18日には「13万6450円」の「藍山税」の収入がありました。大正期まで盛んであったと思われる轟木集落の藍玉製造については、すでに徳宮重成氏によって紹介されていますが、ここでは、大正11年（1922年）4月1日の「字宝地山林ヨリ鉄道枕木税収入」という記事に注目します。

右の記事から、轟木集落の共有林（小字宝地に所在）の材木を鉄道枕木として移出していたことがわかります。近代の交通史で重要な役割を担ったのが鉄道

ですが、往時の轟木はその時代性を捉え、集落の経営にも活かしていたと言えます。

徳之島と鉄道枕木と言えば、昭和56年（1981年）に田端義夫が唄いヒットした新民謡『徳之島小唄』が思い出されます。

こだま返して 倒れる松は

伸びる日本の 枕木よ

俺の在処は 徳之島だよ

お前蚕を飼え 紬織れ

ハレ紬織れ

『徳之島小唄』の作詞者である「名倉幸一郎」は、戦時中に山集落に滞在していたと言われている。この4番の歌詞は名倉が目にしてきた枕木移出で活況だった山集落の風景であることが推測できます。また、それが「伸びる日本」という国家の「成長」に結びつけられていたことも指摘しておきたいと思います。

ここで取り上げたことからの他にも、明治・昭和初期のシマの様子を轟木集落の記録からはうかがえます。徳之島において、この時代の集落を伝える記録は他には見あたらず、貴重な歴史



徳之島小唄記念碑

史料となつていきます。何より、現在と未来の轟木を創っていくにあたって、先人の遺した記録を紐解きながら集落を運営されている轟木の方々は、町誌編さんの先達とも言えるのではないのでしょうか。

（町誌編さん室 竹原祐樹）

問 郷土資料館
☎0997-82-2908

（*）『徳之島郷土研究会報』第八号に翻刻。

轟木集落の記録

